News Letter vol.22

Japanese Society for Dance Research

目　次

1.　第76回大会のご案内･･･ 実行委員長 :大橋奈希左

2.　世界の舞踊学関連学会の情報
2-1. インタビュー
人間国宝 大倉源次郎先生にきく
EXPO 2025「伝統文化未来共創プロジェクト The Future in Tradition 伝統の中にある未来」
聞き手：波照間永子（明治大学）

2-2.舞踊学関連学会・機関情報
① 芸能学会　波照間永子（明治大学）
② 民族芸術学会　弓削田綾乃（和洋女子大学）

3. 私にとっての在外研究
ドイツ・ギーセン大学　宮下寛司（慶應義塾大学）

4. 国際学会・シンポジウム発表報告
Dance Studies Association　児玉北斗（芸術文化観光専門職大学）

5. 委員会より
5-1. 学会誌編集委員会･･･八木ありさ
5-2. 2024年度学会大会･･･大橋奈希左
5-3. 例会企画運営委員会･･･森立子
5-4. 研究奨励賞選考委員会･･･貫成人
5-5. HP管理委員会･･･寺山由美
5-6. 学術連合委員会･･･貫成人・寺山由美
5-7. ニューズレター委員会･･･波照間永子

6. 事務局だより･･･酒向治子

7. 特報
インタビュー
出会いが拓く「拡大ダンス」　外山紀久子（埼玉大学）

編集後記　奥付

1. 第76回大会のご案内

第76回舞踊学会大会のご案内

第76回舞踊学会大会実行委員長　大橋奈希左

第76回舞踊学会大会は、2024年12月7日（土）・8日（日）の2日間にわたって、京都女子大学（京都市東山区）で開催いたします。

大会のテーマは、「舞踊における身体性―その歴史と教育をめぐって―」です。新型コロナウイルス感染症がもたらした影響は、私たちに大きな社会的変容をもたらしました。今後、舞踊はどのような価値や役割を担うのでしょうか。本大会では、加速する社会の在り様を見据えながら「身体性」に着目し、舞踊とダンス教育について考察、展望する機会にいたします。一般研究発表では、舞踊に関する多様な19件の口頭発表と、若手研究者を中心とした4件のポスター発表が行われます。また、大会特別企画として、「基調講演」と「シンポジウム」を開催します。1日目の夕方には、昨年に続き対面での「懇親会」を予定しております。 1日目の基調講演は、國學院大学客員教授の小池寿子氏に「『死の舞踏（Dance Macabre）』の成立と変容―行列からダンスへ―」というタイトルでご講演いただきます。「ダンスマカブル」の名称がいつ成立し継承され、変容したのか、その経緯を古文書から辿りつつイメージ画像を用いてお話しいただく予定です。2日目のシンポジウムは、「身体性を基軸とした日米の舞踊教育を観る」というタイトルで、米国から招聘するデボラ・ダマスト氏をはじめ3名のパネリストにご登壇いただいて実施します。それぞれのシンポジストに専門領域での実践についてお話しいただき、日米の相違やこれからのダンス教育とソマティック教育での新しい展開を討議する場にいたします。

大会の事前参加登録の締め切りは11月23日（土）です。登録は、右下のQRコードより、お早めにお申し込みください。なお、大会の詳細なプログラム、一般研究発表の抄録、基調講演・シンポジウムの概要は、舞踊学会HPに掲載いたします。資源節約のため印刷資料の配付はいたしませんので、恐れ入りますがご自身でダウンロードしてご持参ください。 学会大会へ奮ってご参加いただきますよう、皆様の登録をお待ちしております。

記

1. 日時：2024年（令和6年）12月7日（土）・8日（日）
2. 会場：京都女子大学（京都市東山区）
3. 内容：一般研究発表
　　基調講演「『死の舞踏（Dance Macabre）』の成立と変容―行列からダンスへ―」
　　小池寿子氏（國學院大学客員教授）
　　シンポジウム「身体性を基軸とした日米の舞踊教育を観る」
　　パネリスト ダンス教育…デボラ・ダマスト氏（ニューヨーク大学ステインハード校）
　　ダンス教育…高橋和子氏（静岡産業大学）
　　ソマティック教育…吉田美和子氏（上智大学）
　　舞踊学会総会

以上

2. 特報

2-1. インタビュー

人間国宝　大倉源次郎先生にきく
EXPO 2025「伝統文化未来共創プロジェクト The Future in Tradition」
伝統の中にある未来

聞き手：波照間永子（明治大学）

大倉源次郎（おおくらげんじろう）
人間国宝。小鼓方大倉流十六世宗家。1957年生まれ。父十五世宗家大倉長十郎に師事。1964年独鼓「鮎の段」にて初舞台。1985年十六世宗家を継承。新作能、復曲能に数多く参加。能楽DVD「大和秦曲抄」「五体風体」を制作。大阪市咲くやこの花賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。2017年に重要無形文化財保持者各個認定（人間国宝）。
公益社団法人 能楽協会理事。日本伝統芸能教育普及協会むすびの会理事。児童・生徒を対象とする能楽体験講座を各地で開催。

能楽 囃子方 大倉流小鼓方十六世宗家、大鼓方宗家預り、大倉源次郎の個人HP
https://www.hanatudumi.com/profile.html(2024/10/25アクセス)

来年開催される大阪・関西万博EXPO 2025において、「伝統文化未来共創プロジェクト The Future in Tradition」の企画が進められています。このプロジェクト立案の経緯、趣旨、内容などを、人間国宝・大倉源次郎先生を迎えお話いただきます。

波照間：このたびは舞踊学会ニューズレターの企画にご協力いただきありがとうございます。いよいよ大阪・関西万博が来年開幕します。先日、ご一緒しました日本伝統芸能教育普及協会むすびの会の理事会で、大倉先生から興味深いプロジェクトのお話をお伺いしまして、舞踊学会会員にもお知らせいたしたくインタビューの運びとなりました。「伝統文化未来共創プロジェクト The Future in Tradition」HPトップ画面にこう記されています。

変化の激しいテクノロジーからではなく
日本の伝統文化から 伝統の中にある未来の発展を願う

万博では最新のテクノロジーを前面に出すのかと思いきや、日本の伝統文化から……、とあり、心を動かされました。

EXPO’70から55年　人類は地団駄を踏んでいる・・・

大倉：私もこのプロジェクトに参画させていただきまして、現代を生きる皆さんと一緒に豊かな未来を創っていけたら嬉しいです。EXPO’70のときには私は中学1年生でした。にぎにぎしく世界中から人が集まり、これほど多くの外国人を見たことがなかったというぐらい外国人に囲まれて、未来の日本、世界の姿を夢

2. 特報

させていただきました。もうこれで戦争もなくなり平和な世界になると。あれから来年で55年目になるんですが、なかなか人類は進歩と調和といって進んでいるように見えて地団駄を踏んでいる。

物質文明は発達したけど、人間はあまり変わっていない。これからはSDGsなど……、多くの課題が見えてきた中で、日本が伝統文化を大事にする歴史を刻んでいるという事実に改めて焦点を絞って、その中に未来を創っていくヒントがあるんじゃないかという皆様の思いがトップメッセージに集約されました。

大阪・関西文化の土壌

大阪はよく「笑いとたこ焼きしかおまへんねん」と、笑いのネタにされるような所ですが、実は世界の国々の中で笑いを自慢できる国なんてそんなにないんじゃないか。このお笑いが起こるっていうことは、人々が幸せに生活をしていてとても豊かな環境が整っている。なおかつ言葉が豊かに発せられているという証拠なんですね。戦争などの重いテーマがいっぱいある中では笑いは起こらないわけですよ。なぜ笑える文化を先人たちが創ってくれたのかをしっかり検証してみたいとの思いが共創プロジェクトの要かと思います。

たこ焼きに象徴される食文化が豊かな場。これ関西では食い倒れっていいまして世界中のおいしい食べ物が、大阪、神戸の港町から集まって、山海の珍味が結集したのがたこ焼きなんですね。たこ焼きを作るために鉄板に穴を開けて、わざわざあの丸い玉を作るというところにこだわれる食文化の豊かさっていうのは、他にはなかなかないわけです。せいぜいフランスのエスカルゴの皿ぐらいかなっていうようなことで。よく笑いのネタになるんですが。こういう文化が育まれた原因を知っていないと、それこそ、ただただ笑いとたこ焼きで済ましていると‘笑われる文化’になっちゃうぞというのが、今回皆様が寄り添った一番の原因ではないかなと思っております。

人としての記録メディア ～お稽古でつながる世界観～

日本文化に希望の未来を共創しようと集まった今回のプロジェクトはこの万博で、大阪・関西の文化を世界の人々にもう一度、再発見、再発信する機会を頂きました。

大阪にはどんな文化があるんだろう？お茶、お花、お香、そういう室町に花開いた文化を横軸として、縦軸はなんと1400年前の雅楽、そして700年前の能楽、400年前の歌舞伎、文楽、そして上方舞、京舞、落語、演芸に関わる文化が、お稽古を通して人から人へ伝わっている。これがメモリーとか何とかで記録媒体に取って入れてしまうと、それが何かで失われてしまったらもう消えてしまうわけですが、人間がいる以上、その技術を受け継いだ人がいる以上、心を受け継いだ人がいる以上、これはつながっていく。ですから、記憶メディアとしての人をもっと大切に考えてみましょうよとの思いがあります。

2. 特報

礼法

人と人の技術と心をつなげているものが、「礼に始まり礼に終わる」お稽古なんです。これを伝えてらっしゃる小笠原礼法の小笠原清基様に代表になっていただいて、日本文化のお稽古でつがっている世界観、これをしっかりと今回の万博でお伝えすることが素敵で、それに伴って雅楽、能楽、などを始めとする各分野が、先人の教えをなお新しく引き継いで次の世界につなげていく伝統の燈に新しいエネルギーを注ぎ続ける意味を世界発信することが大切だと考えているのです。

伝統を紡ぐとよくいわれますね。昔は、伝統は伝え統べる、ではなくて、「伝える燈（ともしび）」だったんですね。今の、統べるっていう漢字を当てる以前は。オリンピックの火がそうですが伝える燈と書いていました。

伝統を冠する世界は古典を冠することが多いために古いものというイメージが付きまといます。伝統文化が古い時代のものとして現代の実業界、政治経済の世界の皆さんと距離が空いてしまった現代ですが、これから未来を創る人たちが素直に日本文化にまず出会っていただいて。遠い過去のものじゃなくて、いまだに若い人たちがこの伝統文化を継承してることを、一緒に呼吸していただける環境づくり、これが大事じゃないかと考えてみることが重要なのだと思います。

今回の、未来共創ですね。共に創る。そういうプロジェクトになっていると思っております。

和の文化・橋を架ける文化

大阪には、笑いとたこ焼き、更に、和の文化があります。聖徳太子様の時代、1400年前に様々な民族が流入して、いろいろな考え方やイデオロギー、宗教、宗派が違っても、良いところをみんなで力を合わせて国を創る「和をもって貴しの文化」が根付いています。これは近畿が近くに在る幾つもの田んぼと書くように年に一度しかない米作りが根幹事業として国を創ってきたことに根本があります。

大阪、水の都、八百八橋の橋を架けること。すなわち一つの事業に成功すると、橋を架けて人々の役に立つという文化も。忘れてはダメな大切な大阪の文化です。江戸時代の大阪では民間が橋を98パーセント架けたといわれています。公共の橋は十幾つしかないんですね。残りの渡辺橋、大江橋といった屋号やお名前の付いた橋は、皆そのお家の方が商売に成功して橋を架けて、徳積みをして、人のためにこの今の私たちの商いがあるということを示していかれた結果、大阪の都ができた。こういうインフラ整備が整った後は、その方たちは人を喜ばせる文化すなわち上方文化として芸能から笑わせて喜ばす、現代に繋がっていると伺っております。

そういったことをもう一度、この歴史を通して学んでいく、そして未来に私たちがすべきことは何なのかを、もう一度、取り戻していく大きなきっかけになればいいなと。一人一人の力は本当に微力なんですけども、一人一人が気が付いて大きな力になれば、これは世界に発信していく糧になるんではないかということで。皆さんの力を一つにしていくようなプロジェクトとして、

2. 特報

このThe Future in Traditionというコンセプトを基に、来年の万博を一つの足掛かりにして、未来に伝統文化の火をともし続けていく。現代の文明社会の中でどうすればそれを生活文化としてもう一度、取り戻していけるか、これが一つの大きな課題になっていくんではないかなと思っております。

教科書では伝えられないこと

ー：実演家だけでなく多様な業界とタッグを組んで、未来に伝統文化の火をともし続けていくことが目的なんですね。今、源次郎先生のお言葉のなかに「もう一度取り戻す」という課題を伺いました。今、解決すべき日本の課題が集約されていて、大変重要なプロジェクトを動かしていらっしゃると感じています。組織委員会が議論し、これをやろうというような大きな柱というものはございますでしょうか？

大倉：今回のプロジェクトには素晴らしメンバーがいらっしゃいますしまだお名前が出ていない方もいらっしゃいます。このメンバーでないと実現不可能な内容をメインステージのオープニング、そしてポップアップステージ、更に展示場イーストで上演、ご紹介できるのではないかと期待します。また、基本は教科書では伝えられないことを可視化し体感してもらうことを目指すことになると思います。

教育で知識としての文化を教材を使い伝えるときにどうしてもお勉強になりがちな世界を、お勉強にしない世界。今回、私たち実演者が実際に動くことで、その楽しさをダイレクトに伝える。ここが一つのキーポイントではないかなと思います。

先ほどもちょっと言いましたが、日本の伝統文化っていうと遠いものになってしまって、アニメや漫画などのカルチャーのほうが身近なもので、楽しみやすいっていうことだと思うんです。私も実際『おそ松くん』や『オバQ』で育ったマンガ世代、アニメ世代の少年期を過ごしていますので。その親しみやすさや楽しさと、そして人間の行うことによる楽しさ、これがバランスよくいくことがとても大切だと思うんですね。

人間の行いが行いへ、人間の五感が五感として伝わっていく世界。バーチャルがどんなに進んでも、やっぱりリアルな体験に勝るものはないというところを大切にして、人間という記憶メディアの持ってる面白さ、それは人間の体の中にあるエネルギーが人から人へ伝わっていく。そういう面白いと思う心が伝わっていく。お茶にしても、お花にしても、お香にしても。特に礼法で心は心に伝わる。言葉としても伝わる。そしてその喜びが共有できていく、この面白さ、楽しさが能動的に伝わっていくというのが、とても大事だと思うんですね。

何かの記憶メディアにメモリーしておいて、それを繰り返しリピート再生すれば楽しめる受動的にというものではなくて、人間の行いが行いへ伝わっていく。そして人間の五感が五感として

2. 特報

伝わっていくことが大切ですね。

あらゆるジャンルにおいて日本は、自然の音を感じて音楽にし、山の姿を見て舞の姿の手本とした。そういった日本の八百万の神様が働いてる世界観、山川草木悉皆成仏とか、草木国土悉皆成仏という仏教用語に表されているような、自然が私たちの手本ですよ、仏さんの姿ですよ、神様の姿ですよというような、この体の感覚っていうのを取り戻していくっていうのがとても大切なことなんだ。それが私たち伝統文化の世界にはまだ辛うじて残っているので、もう一度、見直していただくチャンスを提供できればと思います。

その中で一つ。この期間中には6月6日の邦楽お稽古始めの日がありますので集う人々に6歳に成って頂いて体験稽古を受けて頂くような企画も出ております。これなどは皆様のご協力がいただけると大変楽しいものになる様に思います。

意外に思われるかもしれませんが今回のプロジェクトに大きな予算がついている訳ではありません。積み上げ式の日本を大切に思う方々の一紙半銭の思いが積み上がって成功できるようにクラウドファンディングなどで全国の皆様にご参加いただけるとありがたいと考えております。

あらゆる境を越える

日本の伝統産業、例えば工芸品であったり、民芸品であったりするのが縦割りのジャンルに分けられています。また日本文化として能楽も、お茶やお花と、縦割りのジャンルに割られてお稽古事と成ってしまって、横の連携がすごく取りにくい変な状態になっています。しかし、これらのジャンルは、元々は日本の生活文化として、それこそ明治維新までは当たり前に周りにあったわけですよね。この物質文明が非常に盛んになった時代の中で、これを当たり前な生活文化としてもう一度、定着し直すには、これから人類がどういうふうに向き合うのかを、このThe Future in Traditionっていう、そういうコンセプトの中から見つけ出していかないと、一番大切なものが消えてしまうんじゃないか？というのが、和文化に携わってる人たちの共有の危機感だと思います。

例えば、舞い、踊り、など体を動かすことでも、今はもうダンスパフォーマンスのほうへどんどん流れていってしまっている。日本人の中にあった舞いや踊りの要素の中にある自然観、これを伝える術が今どんどん失われている。もちろん体を動かすのはとても楽しいことですし。同じ楽しさのようですけど、ちょっとまた質の違うこの楽しさ、面白さを、何とかして次の世代に伝えていきたいという思いがとても大きいんだと思うんですね。

今回のプロジェクト、特に全国青年友好4団体の会長職の皆さまが、来年の万博では一緒に日本文化をもう一回、見直そう！と、賛同してくださったのが大きな励みになっています。また、沢山の文化人の方々が賛同者になっていただいているのも、日本文化に対しての共通の危機感が原因だと思っております。

2. 特報

若い企業人と協働して未来を創る

ー：全国青年友好4団体とはどのような？

大倉：そうですね。全国組織を有する青年経済団体で、

・日本商工会議所青年部（YEG）
・全国中小企業青年中央会（UBA）
・公益社団法人日本青年会議所（JC）
・全国商工会青年部連合会（IMPULSE）

の4つの団体です。その各団体の会長の皆さんにも個人的にではありますがご賛同いただいています。特に本部運営してくださっている日本商工会議所青年部前会長木村麻子様が率いるチームが牽引役と成って若い世代の企業家の人たちも、日本の文化の在り方をもう一度、見直しておかないと、今グローバル化の中で伝統的なものがどうしても変質して薄れてしまうと考えて下さったと感じます。

世界標準に合わせないといけない、外国の人にも初めて見て分かるようにしないとと、分かりやすいほうへベクトルが向いているんですね。ですが、分かりやすいからそっちへいきすぎると、本質から離れて、いわゆる間違ったジャポニスムのほうに誘導されがちなのです。

その中で、どういうふうにして本当に人間の伝えてきた良い伝統を、そのままの形でお伝えできるか、みんなで考えてみましょうという実践が今回のプロジェクトではないかなと思っています。

文化で育まれるもの

ー：特に企業の若い方がそれを理解して後押ししてるというのは、私は素晴らしいことだと思います。おそらく企業の若手の方々は、身近なカルチャーには触れ楽しんでいるけど、どこか心の中でもっと必要なことがあるんじゃないか、軸にすべきものがあるんじゃないかと自問自答してきたのではないでしょうか。今回、大倉先生はじめ大阪の実演家・文化人の皆さまが取り組んでいらっしゃることと、その問いがうまく合致したのだとお察しいたします。大阪のこの万博が一過性で終わるのではなくて、これを機に、様々な業界、多世代に渡る方々と議論し解決策を模索していく場が続くよう願っています。

今回、大倉先生のお話を拝聴し刺激を受けた部分が多くありました。そして舞踊の本質を見失わずに研究しそれを伝える方法を問い続けることの重要性を改めて感じさせられました。最後に舞踊学会の会員に期待することなどございますでしょうか？

大倉：私自身がそんな偉そうなこととても言えないですけれども、やはり芸の本質は衆人愛敬、

2. 特報

そして寿福増長という世阿弥の言葉にもありますように、やっぱり人々に幸せをもたらすことが私たちの最大の喜びで。私たちも本当に戒めないといけないんですけども、小笠原礼法の教えを伺ってますと、「礼法をもって生活の糧にするものではない」という教えがあると聞いたときに、どきっといたしました。私たちはこの豊かな経済社会の中で、ある程度の文化的な生活を送ろうと思うと、やはり経済のために文化活動を行うということになってしまうわけですよね。文化を伝えるために生活しているという発想に辿り着けることが、今の時代、なかなか難しくなっている。経済の余力で文化は育まれるという言い方をしばしば耳にします。経済の余力で生まれた文化は、経済効率の名の下に消されちゃうんですよ。しかし文化で育まれた経済は、その文化が継続する限り壊れないですよね。ですから、江戸時代は江戸文化で、大変な素晴らしい文化経済を育んでいた。戦争があっても、これだけ日本の中に江戸文化は息づいているのは、正しく文化による経済が動いているからだと思います。

これはとても大事なことで、私たちが経済の余力で文化が育まれてるっていうふうになると、いよいよ経済の中で効率の悪いこういうものは消していけみたいな話にならないかと思いハラハラします。

このような時代の中に今、日本に生まれて、日本の伝統文化に携わってる人たち、やっぱり自分たちは何とかなっても、その次の世代のことを考えてもう行動を起こさなけらばならないときに、若い人たちが日本文化にしっかり向き合うと賛同を頂きました。この世代が20年後、30年後、日本文化を動かしだしたときに、きっと良い結果に結びつくのではないかと考えています。僕は、本当に文化的な生活を日本人が取り戻してほしいと願っていますし世界の人々に知って頂きたいと考えています。。

決して自分たちの宣伝のためにやってるのではありません。豊かな文化が豊かな経済をうんでいる。この事実を伝統文化の中から垣間見ていただければ嬉しいなと思っています。

ー：本日は貴重なお話をありがとうございました。

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

2-2. 舞踊学関連学会・機関情報

①藝能学会

波照間　永子（明治大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	藝能学会
英語訳名	
学会設立年	1943（昭和18）年
事務局（場所）	〒343-0025　埼玉県越谷市大沢1620-11
HP	https://www.geinou-gakkai.org/
趣旨・大会情報等	藝能学会は、国文学者・民俗学者の折口信夫の提唱により設立されました。古典芸能、民俗芸能、大衆芸能などを網羅した芸能全般を研究するとともに、その保存振興と創造発展に寄与することを目的に活動しています。 【主な活動】 (1)芸能セミナーの開催（6月） (2)研究大会の開催（12月） (3)学会誌『年刊藝能』の発行（3月）
ジャーナル	学会誌　『年刊藝能』（論文・評論・随筆・創作等を寄稿できる）
入会方法	電子メール本文につぎの項目を記入の上、事務局あてに送付 geinougakkai[at]yahoo.co.jp　　*[at]を@に変更 ①氏名（ふりがな）　②職業（役職名等）学生の方は所属、年次 ③住所　④連絡先　電話・FAX　携帯電話　e-mail ⑤専攻・専門分野、関係分野、興味・関心のある分野 ⑥お知り合いの藝能学会会員の氏名（任意） 年会費：一般　￥6000　学生　￥3000

2. 当該学会に参加して

藝能学会は、伝統芸能に関わる多様な人たちー研究者、作家・評論家、実演家、舞台制作関係者ーが集い交流できる点が大きな特徴であり魅力です。

初めて参加したのは、2018年12月に学習院女子大学で開催された研究大会です。シンポジウム「琉球舞踊 むかし 今 みらい-舞踊身体の伝承を考える-」に招待され、司会兼コーディネータの田中英機先生（前文化庁伝統文化課文化財調査官、前実践女子大学教授）からのご依頼で、たいへん貴重な記録映像「琉球古典芸能大会」（昭和11年、日本青年館）をご提供いただき、戦前活躍した男性舞踊家の技法を調査・報告する機会に恵まれました（波照間 2020『藝能』26号）。研究者だけでなく多くの実演家やプロデューサーの方からご意見を頂戴しました。「あの頃はこうだったけど、今は……変わってしまった」「懐かしい映像、あんな風に踊っていたんだよ」「捨てられずに持っている戦前のプログラムを送るから研究に使って欲しい」といった得難いお話を沢山いただきました。

このときに発見したことが、現在の研究テーマに繋がっています。舞踊学関連の学会以外、近接領域の学会で発表する意義を強く感じています。

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

2-2. 舞踊学関連学会・機関情報

②民族藝術学会

弓削田　綾乃（和洋女子大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	民族藝術学会
英語訳名	Society for Arts and Anthropology
学会設立年	1984年
事務局（場所）	〒560-8532　豊中市待兼山町1-5
HP	https://mg-gakkai.org/
趣旨・大会情報等	民族藝術とは、生活に密着した藝術のことで、その特色は、発生や展開が人びとの生活と深く結びついていることにあります。美術・工芸・音楽・舞踊・演劇・建築・文学等々、あらゆる藝術ジャンルを含む新しいタームとしての民族藝術を冠した学会です。民族芸術に関する基礎的研究と多様な表現活動が行われています。 【主な活動】 (1) 学術大会・総会の開催（年1回：4月） (2) 学会誌『民族藝術学会誌　arts/ 』の発行（年1回） (3) 研究例会（年4回） (4) 会報発行（年2回）
ジャーナル	学会誌『民族藝術学会誌　arts/ 』（特集・論文・報告・評論等を寄稿できる）
入会方法	入会申込書をHPからダウンロードし、必要事項を記入のうえ、事務局宛に送信する。mg.gakkai（at）gmail.com　（*[at]を@に変更、件名は「入会申込」とする）郵送されてきた会費請求書（規定の振替用紙）で納入する。 年会費：正会員8,000円　学生会員3,000円

2. 当該学会に参加して

民族藝術学会には、美術・工芸・音楽・舞踊・演劇・建築・文学等、多彩な領域を専門とする会員が属しています。研究者や実演家、製作者、評論家等、立場も様々です。このような会員の方々が、異なる領域・立場から意見交換し、交流することを心の底から楽しんでいるのが、この学会の大きな魅力でしょう。また、学会誌も、装丁にこだわりを感じる美しさです。

学術大会が、しばしば美術館や博物館、劇場等で開催されるのも特徴的です。私は学生の頃、指導教授やゼミ仲間とともに、インドネシアのバリ島での大会に参加しました。歴史的建造物である美術館での研究発表だけでなく、宮殿や寺院、美術工芸の製作現場なども訪れました。過去から脈々と受け継がれてきた生活と芸術の在り様に心を打たれた貴重な体験となったのは言うまでもありません。

舞踊はあらゆる芸術の総合体でもあるので、民族藝術学会での活動は、思いもよらない気づきをもたらしてくれると思います。また、研究例会や会報などで、フィールドワーク帰りの方から、ニュースで知ることのできない国内外の話を聴けるのも嬉しく、ひいては研究の幅を広げるのに役立っていると感じています。

3. 私にとっての在外研究

「実践と研究の間をつなぐダイナミズムを体験する 」

宮下寛司（慶應義塾大学非常勤講師）

1. 基本情報

渡航先(都市・国名)	ドイツ・ヘッセン州・ギーセン市
研究機関	ユストゥス・リービヒ大学ギーセン 応用演劇学科
在外期間	2017年10月 ー 2018年3月
目的	博士論文執筆の指導を受けるため
研究プログラム	博士課程の学生として在籍
グラント申請方法	慶應義塾大学奨学金（現在は廃止）

2. 在外研究を終えて

私はギーセン大学応用演劇学科に現在でも指導を受けている舞踊学者ゲラルト・ジークムントのもとで学ぶために、2017年度の後期の1学期間在籍していた。研究滞在としては短い在籍期間ではあるものの、今後ギーセン大学と日本との相互交流が行われるきっかけになるように、学科の特徴を私の経験をもとに記したい。

ギーセン大学の応用演劇学科は1982年に設立された比較的新しい学科である。実践と研究の相互交流による深化を目指す姿勢は、そのカリキュラムにはっきり見て取れる。“Master Choreographie und Performance (MA CuP)”というコースが設置されてるが、これは実践を志す学生のための修士課程であり、学生たちは、振付やパフォーマンスを批判的に捉える理論を学びつつ、実験的なダンス・パフォーマンスを制作する。ギーセン大学の最大の特徴は伝統的な意味での演技やダンスにこだわらないより実験的な舞台芸術を志向している点である。演劇の領域ではあるが、リミニ・プロトコルやShe She Popといった演出家グループやルネ・ポレシュといったポストドラマ演劇を牽引したプレイヤーを多く輩出していることからもそのことがわかるだろう。学科は中・大規模のスタジオを2つ有しており、そこでは実技のための授業が行われるだけでなく学生主体のフェスティバルも開催される。それだけではなく、ギーセンからほど近いフランクフルトにあるムゾントゥルムという劇場での公演やイベントを開催したり、さらにドイツ国内におけるダンス・フェスティバルと連携したりするなど、アクチュアルなダンス・演劇シーンと接続している。また、CuPのプログラムは国際的な協働を積極的に行っており、各国からの留学生が集ってもいる。学生たちと話す際にドイツ語と英語を話す機会はほぼ同じ程度であったと記憶している。

3. 私にとっての在外研究

現代音楽家であり演出家であるハイナー・ゲッベルスが長らく実践領域における教授を務めていたが、定年退職にともないフランス出身のダンサー・振付家であるグザヴィエ・ル・ロワがそのポジションに就いた。学生との対話を重要視しながら、主体性を育て自由で挑戦的な姿勢を養うことを目指している。

自らの退官記念講演会の後に、学科スタジオで行われたアフターパーティーでDJに興味を持つハイナー・ゲッベルス

研究においては欧米圏における現代舞踊・演劇研究をリードし続けているゲラルト・ジークムントとボヤーナ・クンストが教鞭をとっている。ゲラルト・ジークムントはドイツ国内屈指の卓越した理論家であり、彼のもとで研究を行う博士課程の学生やポストドクターの研究者はドイツ国内でも実力ある研究者として認められている。ジークムント、クンストいずれの研究チームも非常に風通しがよく、研究上のストレスを互いにケアしあっている。また、実践領域の教員や大学院生たちとも積極的にかかわっており、学科内における研究と実践はかなり密に連携している。

私の研究のほとんどはジークムントの理論と方法論に負っている。彼には定期的にレベルの高い指摘をもらっている。しかしながら、研究者として実践の現場に携わったり学生たちと関わったりする姿勢は、ギーセン大学のコミュニティ全体から学んだものである。キッチンやソファーもある学科棟で教員や学生、アーティストたちとすれ違い話を交わしたり、スタジオでの公演やパーティに参加したりと授業内外での交流は活発であった。高度な次元での学術的な議論および学生たちの挑戦的な姿勢はそのようなコミュニティがあるからこそ可能になるのであろう。

近年より柔軟にかつ複雑になる日本のダンスシーンにとってギーセン大学のカリキュラムやコミュニケーションから学ぶことは多いだろう。日本からの留学生がいまだいないことは残念ではあるが、いずれその機会を得る人が日本のシーンをよりダイナミックにしてくれることを期待している。

学科棟にあるソファースペース。キッチンがすぐそばにあり学生も教員も集まっていた。（現在キャンパスのリノベーションが行われ雰囲気は変わっている）

4. 国際学会・シンポジウム発表報告

Dance Studies Association

児玉北斗（芸術文化観光専門職大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	Dance Studies Association【略名】DSA
日本語訳名	ダンススタディーズ学会
学会設立年	2017年(1969年設立のCongress on Research in Danceと1978年設立のSociety of Dance History Scholarsが2017年に合併)
事務局（場所）	アメリカ、イリノイ州
HP	https://www.dancestudiesassociation.org/
趣旨・大会情報等	「DSAはダンス関連領域において、多様なアプローチとグローバルに包摂的かつ敬意に満ちた対話の奨励を通じて、ダンスの革新的な分析を推進します。また芸術、人文学、社会科学をまたぐ受容者層に向けて、研究、出版、パフォーマンス、そしてアウトリーチを通して、ダンス・スタディーズの領域を促進しています。」（学会Webサイトより抜粋） 大会は年1回。次回大会「未規定な状態：身体、領域、プラクシス Indeterminate States: Bodies, Fields, Praxis」はアメリカ、ワシントンDCのジョージ・ワシントン大学にて2025年6月25日から29日まで開催の予定。
ジャーナル	Dance Research Journal
入会方法	オンライン （学会Webサイト内Membership>Join us>New Usersから登録可。学会費は収入などの条件によって異なる）

2. 当該国際学会に参加して

ダンススタディーズ学会（DSA）はアメリカ最大の舞踊系学会で、ダンスに関連する幅広い領域の研究を扱っています。今年の大会は「動きの地図学 Cartographies of Movement」というテーマを掲げ、ダンス研究においてローカルな文脈と国際的な文脈をつなぐ新たな経路を探る試みとして学会設立後はじめて欧米を離れ、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスにて開催されました。また今回のテーマにはダンス研究という学問領域に内在する問題に対する反省も込められています。特に植民地主義の影響が色濃く残る南米での開催ということを反映し、多くの議論が「デコロニアル（脱植民地化）」の問題を共通項として進められていました。ダンスの政治性に意識的であり、国際情勢に対応したアクチュアルな議論を推奨しようという姿勢が明確に打ち出されている点も、DSAの特徴の一つであるように思います。

4. 国際学会・シンポジウム発表報告

写真1：ブエノスアイレスのオベリスク

大規模学会だけあって今回の大会も5日間開催され、会期中はびっしりと研究発表やイベントが詰まっていましたが、直前に世界的な航空システム障害があり、また遠隔地での開催だったこともあり、残念ながらぎりぎりのタイミングで参加をキャンセルするケースが続出してしまいました。その結果ほとんどのパネルが再編成されることとなり、私は当初「揺れ動く存在論 Ontology in Motion」というパネルで発表する予定でしたが、発表予定者3名中、最終的に参加できたのは私だけ、しかもモデレーターも欠席ということになり、同様に欠席者の多かった他のパネルからの発表者と一緒に発表を行いました。モデレーターはサンパウロ・カトリック大学教授で日本でも研究をされているクリスティーン・グライナー教授が急遽つとめてくださり、なんとか無事発表を行うことができました。

研究発表は非常にコンパクトな会場で行われましたが、モデレーターが雰囲気をやわらげつつ、発表者も聴衆も一体になって議論を行う場づくりが行われていました。聴衆の人数制限はないものの、なにせ会場が狭く座席も限られているので、時には地べたに座ったり、車座になったりと非常にリラックスした形で議論を行い、どのパネルも親密で充実していました。白熱した議論の場ではありつつも堅苦しさは全くなく、学生から著名な研究者までが協力して建設的に意見交換が行われる空気が印象的でした（ちなみにきっちりとしたスーツなどを着ている人はほぼ見当たりませんでした）。

写真2：研究発表会場の様子

4. 国際学会・シンポジウム発表報告

個々の研究発表はもちろん、準備されていたさまざまなアクティビティのどれも非常に充実したものばかりでしたが、大会全体をとおしてDSAの学会としての姿勢が色濃く打ち出されており、組織運営の側面においても非常に勉強になりました。私が特に感心したのが、活発な議論を促しつつも差別やハラスメント行為が起きないよう、さまざまな努力がなされていた点です。参加にあたっては差別・ハラスメント行為に関する学会ポリシーへの同意が前提で、会場で着用する名札にもポリシーに同意した旨が記載されており、一定のルールに基づいた振る舞いが求められるような合意形成が試みられていました。また政治的に繊細な問題を扱うパネルの参加者には、参加にあたっての各種注意事項のほか、撮影や記録を禁止するプロトコルなども共有され、SNS等で情報が一人歩きしないよう配慮がなされていました。学会大会は自由な議論の場とはいえ、これらの手順を疎かにしないことで国際学会に相応しいモラルが担保されていると実感しましたし、繊細なトピックに踏み込んだ議論も安心して行える環境が整えられていました。

アルゼンチンはとても遠かったですが（片道30時間超え！）、ダンス研究の最先端とこれからの学問のあり方を垣間見ることができ、長旅も報われる刺激的な経験となりました。ワシントンDCで開催される次回大会の発表申し込みは11月から始まる予定です。通常の研究発表の他にワークショップやポスター発表も募集があるようですので、関心がある方はぜひ学会ウェブサイトをチェックしていただければと思います。

写真３：コロン劇場にて筆者

5. 委員会より

5-1. 学会誌編集委員会･･･八木ありさ

学会誌『舞踊學』では査読を経て受理された投稿論文(3月末日締め切り：投稿規定 https://danceresearch.jp/buyougaku/kitei.htm)の他にも、会員の皆様の著作情報が掲載されます(単著、共著、翻訳。ただし舞踊学関連書で、本人から報告のあったもの一人5点以内に限る)。ご著書を出版されました際には随時メールにて学会誌編集委員会(buyogaku.editorial@gmail.com)までお知らせください。

5-2. 2024年度学会大会･･･大橋奈希左

2024（令和6）年度第76回舞踊学会大会は、2024年12月7日（土）～8日（日）、京都女子大学において開催いたします。詳細は、学会HPおよび本ニューズレターの「第76回舞踊学会大会のご案内」をご覧ください。

5-3. 例会企画運営委員会･･･森立子

本年度の定例研究会（例会）は6月15日（土）にオンラインで開催されました。4演題の研究発表があり、活発な質疑応答も行われました。ご協力くださいました皆様にこの場をお借りしてあらためてお礼申し上げます。

学会大会の研究発表とは異なり、例会では発表時間が三種類に設定されており、発表者ご自身で選択することが出来ます。来年度も基本的に同様の要領で実施する予定ですので、みなさま積極的に発表をご検討いただければ幸いです。

5-4. 研究奨励賞選考委員会･･･貫成人

令和5年度奨励賞候補について、『舞踊學』第46号に掲載された町田樹氏論文（「フィギュアスケートと舞踊芸術の文化交渉史：ジョン・カリーによる1970-80年代のコラボレーションの意義」）を授賞候補として理事会に提案し、承認された。

5-5. HP管理委員会･･･寺山由美

シンポジウムやワークショップ、研究会、展示の開催や、研究助成金の募集などの学術的な情報を、以下のアドレスまでお寄せください。会員の皆さまと共有いたします。

jouhou-dance-hp@kir.jp（舞踊学会HP管理委員会）

皆さまからの情報をお待ちしております。

※ML配信やHP掲載の手続きに時間を要するため、余裕をもってご連絡ください。

5. 委員会より

5-6. 学術連合委員会

藝術学関連学会連合報告･･･貫成人

1，2023年11月18日（土）、専修大学神田キャンパスにおいて令和5年度第2回委員会が開催され、第18回公開シンポジウムを、「生成AI時代の芸術」というテーマで2024年6月1日（土）13時～17時、東洋大学赤羽台キャンパスにて開催することとなった。オーガナイザーは意匠学会、比較舞踊学会、美術科教育学会が担当。パネリストは、年内に応募要項を周知し、2024年3月までに決めることとなった。また、会長任期満了に伴い、次期会長の選考が行われ、舞踊学会委員、貫が次期会長となった。

2，2024年6月1日午前、令和6年度第1回委員会が東洋大学赤羽台キャンパスにおいて開催され、令和5年度決算、令和6年度予算などが審議された。次期会長より、副会長として日本演劇学会小菅隼人氏（慶應大学）、事務局長として舞踊学会渡沼玲司氏（日本女子体育大学）が推薦され、了承された。

3，同日午後第18回公開シンポジウム「生成AI時代の芸術」が開催され、100名程度の参加者により熱心な質疑が行われた。

4，2024年11月16日（土）、令和6年度第2回委員会を専修大学神田校舎で開催する。

日本スポーツ体育健康科学学術連合･･･寺山由美

2024年度総会が5月25日にオンラインにて開催されました。出席団体数により総会は成立し、全審議事項が可決されました。また、改選により運営委員が変更になりました。

5-7. ニューズレター委員会･･･波照間永子

前号（21号）に続き、22号も「国内外の舞踊学関連機関の情報発信」をニューズレターの柱としております。学会サーバの変更にともない、ニューズレターのメールアドレスが変更になりました。「情報コーナー」等に掲載したい情報がありましたらご連絡ください。

新アドレス　danceresearch.newsletter@gmail.com

6. 事務局だより

その1. 年会費納入のお願い

★昨年度より、年会費納入のお願いをメールでもお送りしております。

メールが届いていない場合は事務局までご一報ください。

郵便払込だけでなく、銀行振込も受け付けております。

★郵便払込取扱票 口座記号番号：00960-5-154553 加入者名：舞踊学会

★銀行振込 ゆうちょ銀行 店番：068 口座番号：普通 1701147

★年会費：7000円

その2. 登録情報変更申請のお願い

年度が変わる時期などにお引っ越し等で住所が変わり、当学会からの郵便物などが届けられない、所在不明の会員の方が毎年増えております。メールアドレス、住所、勤務先等に変更のある方は、学会HPの「各種事務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のページにて変更後の情報をお寄せ下さい。もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。

HP： https://www.danceresearch.jp/jimu.htm

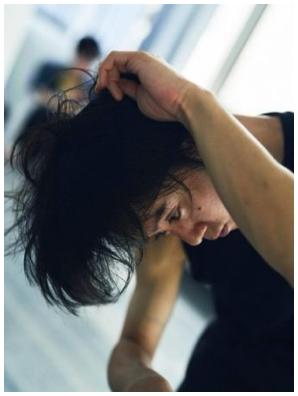
事務局メール：office@danceresearch.jp

舞踊学会事務局　酒向治子

7. 特報

インタビュー：
出会いが拓く「拡大ダンス」

聞き手：外山紀久子（埼玉大学）



©SHIROBON

吉田　拓（よしだ・たく）

兵庫県出身。桜美林大学総合文化学群演劇専修卒。木佐貫邦子、KENTARO!!よりダンスを学ぶ。在学時から様々な活動を重ね、その後ダンサーとして国内外のKENTARO!!振付作品に多数出演。また、劇場勤務を経て、原宿のオルタナティブスペース「VACANT」にて企画制作を担当。ダンス、音楽、映画など多ジャンルのイベントを実施する。
現在は自身のダンス・パフォーマンス作品の創作に加えて、パフォーマンスプラットフォーム「Stilllive」への参加、アーティストコレクティブ「pito」メンバーなど、異なるジャンルのアーティストとのコラボレーションを積極的に重ねている。また、企画プロジェクト「Phyms」として、2024年1～3月に多声的にコンテンポラリーダンスを検討するイベントシリーズ「WEEKENDS」を、4月からは既存の枠からはみ出すアイデアの発表の場「圏外」を継続して開催中。Dance Base Yokohama アニュアルレポートなどの冊子編集、太極拳や気功の実践リサーチも行う。

「拡大ダンス」は「舞踊の定義を拡大した」というイヴォンヌ・レイナーや「舞踊は目に見えるようになった息」といったアナ・ハルプリンなどから示唆された、かなり勝手な緩いカテゴリーです。ポストモダンダンスやそれに続く一部のコンテンポラリーダンスのような、「ダンスとノンダンスの間」を行き来する活動が示唆するもの、芸術諸ジャンルの揺らぎ、現代アートのなかに散見される、パフォーマンスないし（舞踊や音楽など）「ミューズ的芸術」への接近、といった問題に関わってきます。吉田拓さんのお話には、非西洋前近代の身心調整技法への開かれと同時に、同時代アートとの自在な往来といった、半世紀の時を経てジャドソン・グループとも共通する問題が見えてくるのではないでしょうか。「気の研究会（キケン＝KIKEN）」を立ち上げた暁には（いつ？）、ダンスやパフォーマンスによって、自らの身体と出合い直す方法を提示できる可能性について、皆様からの知見を伺いたいと願っております。（外山紀久子）

ー：それでは開始いたします。きょうはモダンダンス、ストリートダンスの素地がおありで、「ダンシー」な舞踊やコンテンポラリー・ダンスの世界で活躍されている一方、気功や太極拳などの心身調整技法、ソマティクスや、他分野のアーティスト――小林勇輝さんや山口みいなさんといった方々――との交流を積極的に取り入れている吉田拓さんにお話を伺います。ダンスとその外を自在に行き来している「拡大ダンス」の実践家・思想家として今回インタヴューをお願いいたしました。拓さん、どうぞ、簡単な自己紹介をお願いします。

吉田拓（以下吉田）：吉田拓と申します。僕は大学生の頃から木佐貫邦子先生やKENTARO!!さんとの出会いを通じて、コンテンポラリー・ダンスの世界で踊ったり、作品を発表させていただいてきました。数年前からパフォーマンス・アートに関心を抱き、ダンス以外の表現領域で活動している、身体に関心を持つ

7. 特報

アーティストたちとの交流をきっかけにパフォーマンスも行うようになりました。加えて、Phymsというプロジェクトを立ち上げて広い視野からコンテンポラリー・ダンスを扱うイベントを企画したり、馬車道にありますDance Base Yokohamaの年間レポートの作成をさせていただいたりと、様々な角度から身体表現と関わっています。

ー：ありがとうございます。以前にオンラインの研究会*1で「気」に関心を持ちだということでお話を伺って、太極拳とか、あるいはロルフィングの施術の経験を詳しくお話しいただきました。個人的にはそれももうちょっと伺いたいというか、その補いや続きをお願いすることも考えたのですが、やはり、今、一番最新のご自身の活動や関心に沿ったお話がいいかなと思って。また、この夏、河口湖のエクスペリメンタル・キャンプに参加されたということでしたので、それをお話しいただければと思っております。

ただその前に、以前、小林勇輝さんのワークショップに参加されたときのことをお話しいただき、今も自己紹介の中でパフォーマンスにも関わっていらっしゃるということでしたが、アート系の方との交流は今の若手の方の中には比較的多く見られるのでしょうか。あと、小林勇輝さん、いろいろなさっている方だと思いますけど、その実験的パフォーマンスのプラットフォームにも参加なさったきっかけというか、その辺り、少しだけお話しください。

吉田：僕は幼い頃からダンスに触れていたわけではないこともあり、ある時期から一般的なダンスの行われ方に対して違和感を抱くようになりました。決まったムーブメントを創作し、失敗しないように練習して、決まった席に座った観客が黙って観ている、というのは不自然なように思えてきたのです。もちろん効果的に身体表現を見せるという意味で非常に合理的な形式だと思いますし、多くの素晴らしい劇場作品に出会ってきましたので敬意を抱いています。その一方で別の身体表現のあり方が存在するような気がしていまして、けれどもそれがどういうことなのかは分かりませんでした。

そのようなことを考えていた時期にアーティストの小林勇輝さんのパフォーマンス作品『Chromosome(Life of Athletics)』(2018)を拝見しました。スポーツにおける性の問題にフォーカスした、身体に多様な負荷をかけていくことでパフォーマーの存在が空間と共に変容していくような表現と出会って衝撃を受けました。会場のどこに座るかは観客に委ねられ、音や光の過剰な演出もなされずに、アーティストと観客の間に対等な関係が目指されていることも印象的でし

*1　2024年3月4日(月)　リモート開催研究会「気配　脱力　迷走:(アストロエステ/気の身体論再々考)」（日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究(C)平成30・31・令和2・3年度　（令和5年度まで再々延長）「〈気〉の身体論による拡大ダンス考」の助成により 開催しました。吉田さんをご紹介下さった越智雄磨さんに感謝申し上げます。

7. 特報

た。いわゆるダンス的なテクニックを用いない、質も強度も高い身体表現を目の当たりにしてしまって、どうしてそんなことができるのかを知りたくなりました。

そこで小林さんに、一緒に作品を作っていただけませんかとお願いをして、2人で『Wooden Connection』(2021)という作品を作らせていただきました。僕にとっては、いわゆるダンス的なムーブメントは用いずに、身体やオブジェクトとの関わりにフォーカスを当てて創作した初めての経験で、上演後にはお互いに「これはあなたの作品だね」と伝え合うことができた思い入れのある作品です。小林さんとの出会いがあったからこそ、異なるジャンルのアーティストとの活動に積極的に関わることができるようになったのだと思います。その後、小林さんとキュレーターの権祥海（ごん・さんへ）さんが設立された、パフォーマンス・プラットフォーム「Stilllive」に参加させてくださいとお願いをして、そこから年に数回の頻度でご一緒させていただいたという経緯があります。様々なアーティストが集うStilliveでの経験は、僕が「Phyms」の活動をする際の指針の一つになっています。

ー：ありがとうございます。吉田さんのようにパフォーマンス・アーティストや、あるいは他ジャンルの同時代のアートに向かう方って、今、割といらっしゃるかどうか？

吉田：それ程多くはない気がしますがいらっしゃいますし、だんだん増えてきているようにも感じます。それは僕も含めてですが、ジャンルを横断して活躍されているcontact　Gonzoさんの影響が大きいようにも思います。

7. 特報

ー：ありがとうございます。それでは河口湖のキャンプのことをお伺いしたいと思います。河口湖エクスペリメンタル・キャンプ。これ、どのようなものかというのは後ほど、私、サイトのインフォメーションを上げようと思っておりますけれども*2、簡単にどういうもので、なぜ参加して、どのような出会いがあったかということを最初にご紹介ください。

吉田：先程申し上げたStillliveでご一緒した花形槙さんにお声がけいただいて、参加することができました。「experimental　camp（以下、EC）」はアーティストの山口みいなさんが主宰されている合宿型のワークショップです。多様なバックグラウンドを持つアーティストが1週間共同生活をしながら、ディスカッションや実践を重ね、その成果をワークショップとして公開するというプログラムです。河口湖にあるアーティスト・ラン・レジデンス「6okken」で行われています。

ー：そうしますと、山口みいなさんの話などもちょっと出ましたけれども、そこでいろいろな出会いがあり、刺激を受けられた？

吉田：僕は3回目のECに参加させていただいたのですが、とても素晴らしいメンバーと出会うことができました。線を引く行為を用いて、他者と非言語的なコミュニケーションを行っている山口さん、社会的な身体を脱することを企てている花形さんに加えて、映像表現で時間や認識の問題に取り組んでいる高山勇吹さん、身体感覚を強く誘発するメディアアートを制作している宇佐美奈緒さん、建築をバックグラウンドに空間経験を扱う大貫友瑞さん、規律訓練をテーマにパフォーマンス作品を発表している都路拓未さん、というメンバーでした。それぞれ発想も関心領域も異なるのですが、身体を介して、自己や他者、世界の認識について考えていたり、対話を大切にしている部分は共通していて、様々な刺激を交換することができました。このメンバーで、今後は「pito」というコレクティブとして活動することも決まっています。

ー：ありがとうございます。そして河口湖で気功体操のファシリテーターを担当されたということを伺いましたけど、それについてもお願いします。

吉田：ECは大まかな1日のスケジュールを話し合いながら進めていたのですが、日々のリズムを整えるためにモーニングルーティンをすることになりました。その中で気功体操を受け持ったんです。僕は2年ほど前から、太極拳や気功に関心を持ち、クラスに通ったり本を読んだりしなが

*2 https://www.instagram.com/6okken/p/C3xZVVhyD9K/?img_index=

7. 特報

ら取り組んでいます。今回初めて他の方をファシリテートしたのですが、予想以上に気に入っていただけました。気についてはいろいろなイメージがあると思いますが、僕は体内の液体（血液など）や気体（空気など）や電気信号（神経など）の流れの総称という風に現時点では捉えています。ECでは、気が流れやすい状態をつくるために身体をほぐしたり、叩いて刺激を与えた後に「光のシャワー」の気功を行いました。両手から細かい光がシャワーのように出ているとイメージして、身体の内側を洗い落としていき、最後に足の裏から地面に流すというものです。実際やってみるとすっきりします。また、複数人で行うと、場自体が充実してくるという発見もありました。

ー：お外でやられていたのですか。それとも室内？

吉田：本当は外に出たかったのですが、日差しが強過ぎたため、室内で行っていました。

ー：ありがとうございます。
　あと、振り付けのワークショップをなさったということを伺ったので、それについてもどのような目的で、どういうやり方で、どのような成果があったかについて、それを少し詳しくお話しいただけますか。

吉田：「ダイアローグ・コレオグラフィ（以下DC）」というワークショップなのですが、名前の通り、対話と振付を組み合わせた内容です。まず参加者は4名ごとのグループに分かれて対話を行います。お互いのことを少し知った後で、2人1組になり、「振付をする」「振付される」という役割を交互に担っていただきます。振付を行う前にお伝えしたのは、「振付は相手の動作・動線・配置を指定することと考えてみてください。いわゆるダンス的な動きを生み出す必要はありません」ということと、「相手の心身を傷つけないでください」「嫌だと思ったら、断るか、別の提案を伝えてみてください」ということくらいです。ワークショップの最後にそれぞれが生み出した振付の発表を行い、創作プロセスを教えていただきました。僕はダンスのトレーニングを経験していなくても、コミュニケーションを通じて振付を行うことは可能であることや、振付には極めて多様な方法があることを、参加者の方から教えていただきました。
　僕は一般的なダンスのワークショップやレッスンは「誰もが踊ることができる」ということを伝えようとするものが多いように感じています。一見よいことのように思えますが、そもそもそこで想定されている「ダンス」とは何か、と検討することが参加者には許されていないのではないでしょうか。それはダンス作品の創作過程における、振付家とダンサーの非対称的な関係性とも繋げて考えられると思います。

7. 特報

©chihitosaito

それに加えて、「踊ってもよい」という状況を与えられて踊るだけでは、なかなかダンスという表現形式について思考することができません。僕はダンスを「身体がどのような力によって動かされているのか」を考える方法でもあると考えています。振付の過程では、動きを生み出すために実に様々な物事が用いられます。直接的に動きが指示されることもあれば、イメージや言葉からの触発であるとか、物理的な力で働きかけることもあります。それらを拡大して考えてみると、日常生活で自己や他者が何に動かされているか、そして自身が他者をどのように動かそうとしているのかを見極めることにも繋がるはずですし、さらに視野を広げると社会や国家において働いている力学についても振付の観点から考えることができると思います。DCは振付を実際に体験する機会でもあり、そして、コミュニケーションにおける力学について、ダンスを用いて実践し考える機会でもあると考えています。

ー：参加されたアーティストのかたがたは、基本、ダンスのバックグラウンドをお持ちではないのでしょうか。

吉田：ダンスのトレーニングをされている方もいましたし、そういった経験をされていない方もいらっしゃいました。

ー：それでも吉田さんがある程度の基本的なインストラクションというか手引きのようなものを与えてやってもらえば、ちゃんと・・・。

吉田：皆さんそれぞれに動きを生み出していて、とても魅力的でした。

ー：それは、ぜひ、実際に拝見できたらうれしいなと思います。

そして、それと関連するかどうかよく分からないのですけれども、例えば、コンタクト・

7. 特報

インプロヴィゼーションとか、あるいは、個人で思うままに即興で動くというような場合、そういうやり方に対して、振り付けをして、相手にそれを実行してもらう、あるいは、その振り付けを自らなぞるというような場合、その両者の関係については何かお考えありますか。というか、それは本当に分けられることではないのかもしれないですけれども。

吉田：やはりどこかで繋がっているとは思います。ただ、例えば、いきなり思うがままに即興で動く、というのはとてもハードルが高いように思います。日常的にダンスをトレーニングしている方はできるのかもしれませんが、慣れ親しんだ動きから抜け出すことは難しいでしょうし、自己表現以上のところにはなかなか行き着けないのではないでしょうか。コンタクト・インプロヴィゼーションは自分一人では生み出せない動きと出会う、という意味では繋がる気もしますが、そこでの力の交換はより物質的に行われますし、ある程度の訓練を経ないと怪我をする危険性もあります。DCは身体的には誰でもできると思います。一方で、ある程度共通の言語でコミュニケーションを行う必要がありますが。

しかし、思うがままに踊ることを始めたイサドラ・ダンカンや、コンタクト・インプロヴィゼーションを行ったスティーブ・パクストンらがいて、ダンスにおける身体言語の範囲が広がったからこそ、DCも成立するのだと思います。パクストンをはじめとするポストモダンダンスのアーティスト達が日常的な身体表現をダンスに取り入れたことで、誰でも踊ってよい、という状況が生まれたのだと思いますが、その先には、既存のダンス技法の習熟度とは無関係に、誰でも振付をしてよいという状況が本当はあったんじゃないかという気が僕はしています。誰でも踊ってよい、という状況で止まってしまうと、今のSNSのような状況になってしまうように思うんです。つまり、振付をする人と、それを受け取って踊る人とが明確に分かれてしまうのと、SNSのプラットフォームを生み出して管理する人々と、そこに投稿する利用者が分断されている状況には共通点があるような気がしますし、似たような構造は社会全体に行き渡ってしまっています。少数の専門家に自分の行為の枠組みを委ねてしまうと、結果として主体的に生きる機会が減少してしまいます。だから、そうした状況は変えていく必要があると思っていますし、DCはそのための取り組みでもあります。

ー：確かに、「踊るおっさん」とか。私が好きなのはオウムが踊るやつですけど。TikTokやインスタなどでも盛んに「踊ってみた」の拡散状況がありますよね。

吉田：一見、平等なように見えますけど、結局その場で一番偉いのはプラットフォームを設計し運営している人達で、システムに対して利用者は手出しできないわけですよね。でも、誰でも振り付けてよい、というのは、もう少し主体性を取り戻す行為のような気がしています。振付を

7. 特報

行うことは、自分の手でシステムを変更できる可能性があるということを感じられる体験になり得るのではないでしょうか。それは様々な制度が固定してしまい、消費による選択機会しか与えられていないようにも思えてしまう現代社会において、ダンスに携わってきた僕がやるべきことの一つのように考えています。

ー：ありがとうございます。最後に、もともと太極拳や気功を積極的にやられているというときに、健康への関心をお持ちだったということも、以前、伺いました。特に、東洋医学の病院にも関わりを持っていらっしゃるということで。その辺り、差し支えない範囲で少しお話しください。

吉田：僕がもともと身体に関心を持った、持たざるを得なかったのは、生まれてすぐにアトピー性皮膚炎を発症したことが大きいと思います。いまは症状が落ち着いているので、距離を持って考えられるのですが、アトピーというのは興味深い病気です。命を落とす危険性はありませんが、完全に治癒できる方法が確立されていません。そして、心身の影響が驚く程はっきりと皮膚に現れてきます。必然的に自分と向き合う他ないんですね。そこから心身に関心を持ち、東洋医学とも出会いました。西洋医学が「分けて考える」方法だとすると、東洋医学は「繋げて考える」方法だと思いますし、それは非常に長い年月をかけて積み重ねられた、人間の心身との精妙な向き合い方であって、僕はとても関心を持っています。また、太極拳については2年ほど前から学んでいるのですが、高齢の方が行えることからも分かるように、非常に合理的な身体運用の知恵が詰まっています。健康のために行うこともできますし、高度な身体的な探求も行える、裾野の広さにも魅力を感じています。どちらも人間について、考えて実践している領域で、僕が行っているダンスやパフォーマンスとも繋がっています。芸術表現は簡単に無意味なものと切り捨てられてしまうこともありますが、人間について考えることは社会にとって大切なことであるはずです。東洋医学や太極拳は社会にとって明らかにプラスの側面がありますが、僕はそれらに触れながら、どのように身体表現の活動を行えばいいのかを考え続けています。

（了）

編集後記・奥付

今回も原稿の端々から、ダンスというものの懐の深さ、そこに関わる人々の熱い眼差しを感じました。気軽に読めるニューズレターではありますが、だからこそハッとする瞬間もあることでしょう。ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。（岩澤）

会計と校正を担当させて頂き、先生方のおかげで無事に任期を終えることができました。時勢を鑑み企画を打ち出しインタビューの人選を行う委員の先生方、興味深い原稿をお寄せくださった学会内外の先生方から、たくさん勉強させて頂きました。6年間ありがとうございました。（小林）

今回も編集委員の先生方の迅速なご対応、大変勉強になりました。ありがとうございました。（髙野）

「大殺界って本当にあるのかな、お祓い行きたいかも、、」と思うような日々の中、コンテンポラリー・ダンスの現在地を垣間見る晴れやかな時間を与えていただきました。インタビューにご参加いただいた吉田拓さん、ご協力いただいた越智雄磨先生、ありがとうございました。この６年間、ほぼ休眠状態のままで申し訳なかったです。素晴らしいチームに参加させていただき、心より感謝申し上げます。（外山）

投稿者、編集者、皆様のご協力のおかげで、今号も完成しました。ありがとうございます。（松澤）

今号もなんとか形になりました。お忙しい中、素晴らしい原稿をお寄せいただきました先生方にお礼申しげます。（宮川）

お忙しい中、貴重な原稿をお寄せいただいた先生方に感謝申し上げます。（武藤）

インタビューにご協力をいただきました大倉源次郎先生、ご寄稿くださいました先生方に心よりお礼申し上げます。おかげさまで６年間、微力ながらニューズレター編集のとりまとめ役をつとめることができました。会員の皆様、そして編集業務にご尽力くださったニューズレター委員の皆様、ご支援いただき本当にありがとうございました。当初は、国際的な情報の収集と発信を目指しスタートしたのですが、委員と議論を進めるなかで、国内の情報を共有することも重要だと思い至りました。ニューズレターを通して、会員の皆様が、舞踊学はじめ関連領域にも視野を広げ、国内外の研究者や実演家との繋がりを拓いてくださることを願っております。（波照間）

ニューズレター第22号
発行者：舞踊学会（会長：猪崎弥生）
発行日：2024年11月10日
編集（姓の五十音順）：
岩澤孝子　小林敦子　高野美和子　外山紀久子
波照間永子　松澤慶信　宮川麻理子　武藤大祐

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター委員会
danceresearch.newsletter@gmail.com